

【連載】

日中学術交流の現場から 第 4 回

北京から第五福竜丸元乗組員の市民科学者、
大石又七さんへの手紙

—第一便—

山口 直樹 (北京日本人学術交流会責任者)

はじめに

長らくごぶさたしています。2006年の5月に第五福竜丸記念館でゴジラについて報告してから14年ちかくの年月が、過ぎましたが、お元気でしょうか。

東京で大石さんにお会いすることができたのは、占領史家の笹本征男さんが、大石さんの著書『ビキニ事件の真実』(みすず書房,2004)をもとにした「『ビキニ事件の真実』に学ぶ会」に参加するように促してくれたからでした。

その笹本さんも2010年に亡くなってしまい対話することはかなわなくなり無念というほかないのでありますが、大石さんと合わせてくれたことについて私は笹本さんに感謝しなければならないでしょう。また、この間、大石さんとメールでやりとりをさせていただくことができたのも幸運だったと思います。



大石又七氏と筆者

1. 大石又七さんの危機意識

大石さんから2007年に北京大学のほうにいただいた年賀状には、「軍靴の音がヒタヒタと近づいてきていると思いませんか。政治が軍国主義一族の手に渡ってしまい心配です。太平洋戦争のあの悲惨な光景が頭をよぎります。今度は焼夷弾や爆弾など比較にならない核兵器ですから」と書いてありました。このころは第一次安倍政権のころでした。「戦後レジームからの脱却」をかかげるこの政権は、たしかに「軍国主義一族」といってよいでしょう。

岸信介の孫、安倍晋三は、その13年後も依然として権力をにぎって大手メディアを「アンダーコントロール」しています。福島原発が、アンダーコントロールされているのではなく大手メディアが、「アンダーコントロール」されているだけのはなしです。

私が、第五福竜丸に関心を持つきっかけとなったのは、『ゴジラ』(1954)を見たことなのですが、まさかその時点では、第五福竜丸の元乗組員の大石さんとお会いできるとは、思っていませんでした。まあ私の場合は、ゴジラへの関心が先行していたわけです。

しかし、どうしても第五福竜丸のことは抜かせないことだと気がついたので、大石さんの著作である『死の灰を背負って』を読むことになったのでした。

中沢新一氏のゴジラ論「ゴジラの来迎—新しい科学史」は、ポストモダニズムの影響が、色濃く出た論考ですが、科学史といいながらゴジラ生成の歴史的現場である第五福竜丸の事件には全く触れていません。

これではゴジラ論を扱う科学史としては、いま一つだなど思ったのです。すくなくとも第五福竜丸を基軸に据えたゴジラ論でなければ、日本が、世界に発信する意味は薄れてしまうと考えるようになりました。

そして2007年に夏到北京に送っていただいたはがきには、「敗戦60年がすぎたというのに、日本はまだ戦争好きのブッシュさんのいいなりで加担させられ、その危険なながれを加速させています。戦争を知らない小泉さんや安倍さんが総理に祭り上げられ、やれ核ミサイルがとんでくる危ない、などと大声を出して国民を脅し、軍備増強、海外派兵などと国民の大多数の反対をよそに土俵の外で政治を行い自衛隊を人殺しのできる軍隊にしようとしています。そのため逆に日本におそろしい核兵器が近づいてきてしまいました。」という言葉ではじまっていました。私は、こうした言葉の中にも大石さんの危機意識がよくあらわれていると思いました。

2. 第五福竜丸・ゴジラと「満州国」・中国

大石さんが、北京まで送ってくれた本『矛盾—ビキニ事件、平和運動の原点』（武蔵野書房、2011）を読みました。この本には「振り返ってみると、1928年のパリ不戦条約で、第一次世界大戦の反省から「戦争放棄」という言葉が初めて生まれた。この言葉が、日本国憲法九条に盛り込まれたのだった。「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇、または武力の行使は国際紛争を解決する手段としてはこれを永久に放棄する」。戦争そのものが違法とする考え方である。だが、皮肉にも直後に世界恐慌が起き、それをきっかけに激しい国益の衝突が起こる。日本は不戦条約を免れるため戦争を事変という言葉に変え、1931年9月18日に満州事変を、1937年7月7日、北支（のちに支那）事変を起こし、中国に攻め込んでいく。」（125頁）とありました。なかなか日本の戦争のことをよく勉強されていると思いました。

日本では満州事変が9月18日だったということを知っている人は、そう多くはありません。満州事変は、世界史的イベントといつてよいですが、中国人で9月18日がなんの日か知らない人は、まずいないといつていいです。しかし、加害国である日本では、学校教育で名前を暗記させるだけで満州事変が、どのような意味を持つものなのか、そのようなことはほとんど掘り下げられません。その次の年の上海事変も正確に説明できる日本人となるとさらに少なくなるでしょう。かくいう私も30歳をすぎたはじめて海外に出るまでは、9月18日が満州事変の日とは全く知りませんでした。中国東北部を旅していた時にはじめて私は、9月18日が満州事変の日だということを知ったのでした。日本における日常生活で満州事変を話題にするということが、ほぼ皆無だったため、もちろん満州事変の研究書などは出ていないわけではありませんが、一般の人はあまりそういうものを読みません。だから満州事変のことは学校教育でしっかりと教えるべきだろうと思います。実は、私は中国で忘れ難い経験をしています。それは2001年の9月11日のことです。私は、その日、仙台から大連行きの飛行機に乗っていました。2001年9月18日に瀋陽で行われる満州事変70周年の国際会議に参加するためにその飛行機に乗ったのです。ちょうどその日、アメリカのニューヨークの世界貿易センタービルに飛行機が突っ込み、ビルが崩壊するという世界史的といつていい事件が起きていたのでした。

そういう経験をしたために私の中では9・11と9・18が分かちがたくつながって記憶されることになったのです。

大石さんは、先ほどの記述に続け「当時、日本は軍事物資の多くをアメリカに頼っていた。しかし、アメリカには戦争当事国への軍事物資の輸出を禁止する中立法があり、アメリカからの輸入が途絶えるのを恐れた日本軍は、宣戦布告せず事変という言葉を使って侵略していったのだ。」(125-126頁)と書いています。これも鋭い指摘だと思います。

日本は当時の中華民国には、宣戦布告をせずに攻め込んでいった。だから当時の多くの日本人には侵略している意識が希薄であり、あいまいに始まりあいまいに終わった戦争としか意識されないものとなっていました。しかし、侵略を受けた中国側からすれば、これは、満州戦争ということになるでしょう。

また、当時、鈴木庸生という化学者がいました。1878年に石川県金沢に生まれ、1900年に東京帝国大学理科大学に入学、1903年には成績優秀で銀時計をさずかり、1904年には陸軍省から兵器審査の事務を嘱託されている。そして日露戦争の功により、勲六等瑞宝章授章・従軍記章を授与されていた化学者です。1911年に私の調べている満鉄中央試験所の応用科学科長に就任し1922年にそこを離れ、理化学研究所の鈴木庸生研究室の主任となった人でもあります。

彼は、満州事変については「満蒙の資源とわが化学工業」『日本護膜協会誌』(1932)で以下のようなことを述べています。

「近来の満洲の事業は、著しく満鉄沿線に押し込められるようになった。これは支那の軍閥が悪いのか日本が悪いのかわからない。というのは日本が満洲に進出するようになってからたしかに産業は好転し、満洲からの輸出超過が年に一億五千万円にのぼるようになった。ところが、この膨大な資材で満洲軍閥がどんどん大きくなったので、いわば日本が大きくなってやったようなものであるが、軍閥は其上、増長してそのはては、満鉄の事業を妨害し、日本人を満洲から追い出す魂胆で、別に鉄道を敷設したり、こうじては露骨に満鉄の一部を爆破したりした。日本にとってみれば飼犬にかまれたようなものである。とうとう我慢できなくなって今度の満州事変が、爆発したのである。」(284頁)

ここでは中国の軍閥が満鉄爆破をおこなったとっていますが、実際は関東軍の石原莞爾や河本大作によって満鉄の爆破が実行に移され、それを中国の軍閥が行っていたように偽装していたのです。つまりは、満州事変は、関東軍の自作自演でした。この満州事変が、日本におけるジャーナリズムの転換点だったと朝日新聞記者の上丸洋一氏『原発とメディア新聞ジャーナリズム二度目の敗北』(朝日新聞社2012)で述べています。

1937年ごろから日本では「暴支膺懲」という帝国陸軍のスローガンが頻繁に使われるようになります。この「暴支膺懲」というのは、「暴虐な支那をこらしめる」という意味で、社会主義者の山川均ですらこのスローガンを支持していたことがあるくらい当時のニッポン人に浸透していたスローガンでした

さらに上丸氏は、この本で重要な指摘をしています。最終章を「満州国」と原子力新聞ジャー

ナリズム二度目の敗北」という章にしています。

そこで上丸は、「満州国」と原子力は似ている。」という興味深い指摘を行っています。

すなわち「昭和のはじめ満州の広大な大地と資源は、日本人の人口過剰と貧困を救う切り札と考えられた。すべてが灰に帰した戦後、原子力の強大な破壊力を「平和」的に利用すれば、限りない恩恵が、もたらされると期待した。」と指摘し、「資源への願望、欲望が人々を「満州国」や原子力へと駆り立てた。」(438頁)と述べているのです。

大石さんらを犠牲にしてきたのは、戦後日本人の資源への願望・欲望であったとっていいかもしれません。

多くの日本人は、9・11といわれれば、「ああ、あれか」と映像が浮かびます。しかし9・18に関しては多くの日本人は、ピンとこず、映像も浮かばないのです。自国の関東軍が引き起こした出来事であるにもかかわらず、なぜ9・18が起こったのかを知らないのです。だから、私は、学校教育ではまず、しっかりと9.18のほうを教える必要があると考えます。

そしてこの満州事変の結果、建国されたのが、「満州国」です。

この「満州国」建国記念日が、1932年3月1日です。意外と知っている人は少ないのですが、つまり、第五福竜丸がビキニ環礁でアメリカの水爆実験で被曝するちょうど22年前のことです。これ自体は偶然だろうと思いますが、第五福竜丸・ゴジラと「満州国」・中国との因縁は、ほかにもあります。

まず、第五福竜丸が、忘れられつつあった1968年3月10日の朝日新聞の投書欄に武藤宏一さんが、「沈めてよいか、第五福竜丸」という投書をしました。この投書が大きな反響を呼び、1976年に夢の島に第五福竜丸記念館が開館しました。

武藤宏一さんは、当時、26歳の会社員でした。40歳の若さでがんで亡くなることになる武藤さんは、実は「満州国」から引き揚げてきた人でした。武藤さんは朝日新聞への投書で以下のように書いていました。

「第五福竜丸。それは私たち日本人にとって忘れることのできない船。決して忘れられることのできない船。決して忘れてはいけないあかし。知らない人には、心から告げよう。忘れかけている人には、そっと思い起こさせよう。いまから14年前の3月1日。太平洋のビキニ環礁。そこで何が起きたかを。そして、沈痛な気持ちで告げよう。いま、そのあかしがどこにあるのかを」

もし、この投書がなければ、果たして第五福竜丸記念館が、存在していたかどうかかわからないでしょう。大石さんは、このころはまだ人前で話すなど大嫌いで第五福竜丸保存運動を苦々しく見ていたそうですが、人生どこでどう転ぶかはわかりません。

第二に『ゴジラ』(1954)で快活で明るく戦後的な現代青年、尾形を演じた宝田明さんは、北朝鮮の新義州で生まれそこから移住し、「満州国」のハルピンで育ちました。

その後、ハルピンから苦勞して引き揚げてきて20歳で『ゴジラ』(1954)で本格的なデビューを果たしていました。1934年生まれですので、大石さんと宝田さんは、奇しくも同級生ということになります。



宝田明氏と筆者

2011年3月に大石さんの家に宝田明著『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』(扶桑社)のコピーを送らせていただきましたが、大石さんからは、「宝田さんって雲の上の人かと思っていましたが、苦勞されていたんですね」という感想をいただきました。

実際の宝田さんは、「軍国主義の一族」が大嫌いな、非常にまじめな人です。そのことでNHKの番組で発言を止められたこともあるぐらいです。小林節という憲法学者の先生が立ち上げた「国民怒りの党」から政治家として立候補しようとしたことがあるぐらいの人です。

私は、2011年3月9日の夜まで仙台におり、その翌日3月10日の夜に北京に戻って来ていたのですが、3月11日の大地震は、宝田さんからの電話で知ることになりました。もし仙台を出るのが少しでも遅れていれば、仙台に閉じ込められ、北京で宝田さんからの電話を受けることはできなかったでしょう。

その時の発言ですが、宝田さんは、「被爆国の日本だからこそ世界に発信できるメッセージがあるんだ。」と私を励ましてくれました。

私は、大石さんと宝田さんの対談をなんとか実現できないかと思っています。

そして、ちょうどこの2011年3月11日に北京で私が、宝田明さんから電話を受けていた時、東京電力会長の勝俣恒久氏も北京に滞在していたことがわかっています。

ジャーナリストの斎藤貴男氏の『「東京電力」研究—排除の系譜』(講談社2012)によれば、勝俣恒久氏が「第10回愛華訪中団」の一行に北京で合流したのは、2011年3月10日だったとい

ます。この書によれば、彼は団長の立場にありましたが、ほかのメンバー20数人は、四日前の六日に中国入りして、すでに上海、南京市内の見学や電力、メディア関係者らとの交流を済ませていたといえます。「団長」が、北京のみの参加で実体の伴っていない「団長」だったということでしょう。

また、斎藤氏は、勝俣氏が、「第10回愛華訪中団」の合流する前に東京電力北京事務所をも訪問していたことを見逃していません。

実は、2011年3月1日に東京電力は、東京電力北京事務所を開設したばかりだったのですが、勝俣氏は、そこを訪問しています。電力需要の拡大が著しい中国の電力業界と提携していこうとする志向性がうかがえます。それにしてもその開設の日が、3月1日という第五福竜丸がビキニ環礁で被曝した日であるとは、因縁を感じざるをえません。

東京電力北京事務所のスタッフには、3月1日がどういう日かを聞いてみたい気がします。

「第10回愛華訪中団」という団体は、石原萌記という1924年生まれで早稲田大学出身で『自由』といった雑誌を編集していた人物が主催していた団体です。

石原氏は、東京電力会長だった平岩外四氏と親しいらしく、平岩氏と相談して2001年にこの「愛華訪中団」をたちあげ、毎年、中国を訪問していたようです。

メンバーは、電力会社の社長クラス、さらにはマスコミ関係者やOBなどから構成されており、有名なところでは、『Hanada』の編集長、花田紀凱氏なども2011年3月11日に北京に滞在していました。勝俣氏は、3月12日に慌てて日本に戻ったようです。

斎藤氏の本によれば、参加者はそれぞれ5万円程度の費用しか払っていなかったといえます。東京電力の圧倒的な資金力を感じさせる話ではありますが、それ以上に中国の原子力産業と東京電力が、提携しようとしていたということが、私は気になります。

中国は、2011年の福島第一原発直後は、原発に慎重な姿勢でしたが、2012年には、積極姿勢に転じていきました。

現在も中国は、世界最大の原発大国に向けてひた走っている状況です。2030年までに236基の原発を建設する目標を掲げています。これは世界最大規模とっていいでしょう。

しかし、特に中国内陸部にある原発には、懸念が持たれています。中国の隣人として、原発事故を経験した日本人として不透明な官僚体制の中で原発事故が起こる可能性に警鐘は鳴らさなくてはならないと考えています。

たとえば、こうした状況であっても中国人の中にも原発に反対する学者は存在します。

私が、研究留学した北京大学科学と社会研究センターにおられた何祚麻教授は、1927年生まれで18歳の時に広島、長崎へのアメリカによる原爆投下を知り、原爆のすごさに衝撃を受けたといえます。それで専攻を化学から物理学に変更して清華大学を卒業したという人です。中国の原爆開発プロジェクトの両弾一星プロジェクトにも関与されていたようです。

ところが、中国における原発の危険性には、警鐘を発している学者なのです。私も何度か北京大学で顔を合わせたことがあります。「原爆賛成、原発反対」というところが、中国特有で興味深い学者です。

通常、日本では、「原爆反対、原発賛成」という学者が多かったわけですが、何祚麻氏は、院士でもあり、政治的な圧力もなかなかかけにくいようです。

朝日新聞の記者の吉岡桂子氏によるインタビューが「原発大躍進には断固として反対する」―「体制内」からの原発計画反対論」と題して『問答有用』（岩波書店2014）という本に収録されています。よろしければ、読んでみてください。

話を東京電力にもどしますが、2015年11月、経済評論家の佐高信さんに北京までご足労いただき、私の主催する北京日本人学術交流会でお話いただいたことがあります。

その時、東京電力北京事務所の人から連絡があって、「佐高さんの講演会に参加させてほしい。」というのです。佐高さんは、日本の「原発文化人批判」でも名高い人ですが、東京電力の社長だった木川田一隆氏（その弟子の平岩外四氏には、佐高さんは批判的ですが）には、好意的なので話を聞きたいといったのかどうか。直前になって東京電力北京事務所の人から「やはり都合が悪くなってしまいました。」というキャンセルのメールが、私のところに来ましたが、いったいどういうことだったのかは、いまだに謎です。「あれはいったい何だったのか」と今も時々、思い出すことがあります。

私は、2014年に日中経済発信力プロジェクト編『日中関係は本当に最悪なのか―政治対立下の経済発信力』（日本僑報社2014）という本を共著で出すことになったのですが、そこに東京電力北京事務所のスタッフの方が、原稿を寄せており、私は、東京電力北京事務所のスタッフの方と共著をだすことになってしまいました。後から知ったことでやむを得なかったとはいえ、人生には、「まさか」ということが多々あります。

第三に『ゴジラ』（1954）監督の本多猪四郎さんです。この怪獣映画の巨匠は、「満州」にも行ったこともあるし、中国大陸に三度動員され、8年間も中国大陸にいました。

この時の戦争経験が、『ゴジラ』（1954）をはじめとする怪獣映画を奥深いものにしていきます。

第四には、岡崎勝男という第五福竜丸が、ビキニ環礁でアメリカの水爆実験で被曝したときに「日本はアメリカの自由主義陣営に属している。だから私はアメリカの水爆実験を支持する。」と述べて当時の多くの日本人から怒りを買った外務大臣です。この人物、戦前には中国の侵略にかかわっていたことがわかってきました。

1937年、当時の南京の日本総領事に駐在して、それらの記録を東京の外務省に報告していた外交官の一人、岡崎勝男は、戦後東京裁判に関連した国際検察局の尋問調査の中で、南京安全区国際委員会からほとんど毎日のように報告をし、外務省出先機関は、その報告の概要を本省に打電し、報告そのものも本省に郵送したと述べています。

つまり、戦前中国の侵略にかかわり、「鬼畜英米」などと言っていたのが、敗戦を機に手のひらを返したようにアメリカの顔色ばかりをうかがう対米従属の先兵のような存在となりつつ世間的には出世を遂げた人物ということになるでしょう。大石さんにとっては、人生を翻弄した人物といえるかもしれません。

そして第五には、私と大石さんを引き合わせてくれた笹本征男さんです。

大石さんは、笹本さんの葬式に行かれたそうですね。

笹本さんは、親族はすでになくなって身寄りがいないため葬式は、中山茂や常石敬一両先生らが、組織して行ったとご本人から聞きました。2006年、5月に第五福竜丸記念館でゴジラについて報告したとき『ゴジラ』(1954)を上映したのですが、その映画の終わりではぼ一人で強く拍手をしていた笹本さんの姿は、私の脳裏に焼き付いています。

笹本さんについて私は、以下のような追悼文を書いたことがあります。

「笹本氏とはたまに電話でしゃべることもある。年の瀬の大晦日に電話して話をしたとき「母が死んでしまった。だからもう正月は故郷には帰らないんだよ」といったのを覚えている。

その笹本氏は2002年頃、大病を患い入院していた。その死を意識するなかで笹本氏は、詩を書き始めている。幸い病は回復したので、そのときの詩を笹本氏は詩集として出版している。

その詩集が『いずも』(土曜美術社出版2005)である。これは笹本氏が私に送ってくれた。

その詩集のなかに「撫順」という次のような詩がある。

母が二十代の一時期いた撫順

その頃の写真が一枚ある

白い割烹着にエプロンをした

髪を真ん中で左右に分けた若い女がいる

窓ガラスに十字の張り紙をしたカフェの前だ

母はそこで働いていた

時々馬賊が殺されるのを見た、と

声をひそめて語ったことがある

九州の佐賀の寒村から中国に渡る

ひとりの若い女

1940年代の撫順

母には侵略者ということばがにつかわしくないように

思いたい、が

無告の民もまたその一人だ

母の一枚の写真とそのことの距離

大正五年生まれの母に問えない撫順もある

(2002年11月4日)

詩人の石川逸子は、「『いずも』に寄せて」のなかで「噴出するようにして書かれた詩群のなかに、いま生きている私たちにとって大事な何かが、宝石のように隠れている気がします。」と評している。

1940年代の撫順

母には侵略者ということばがにつかわしくないように
思いたい

というところまでは、ある意味、平均的な日本人の歴史認識であろう。
しかし、そのあとの

が

無告の民もまたその一人だ

母の一枚の写真とそのことの距離

大正五年生まれの母に問えない撫順もある

という続きの詩句は、笹本氏でなくてはおそらくはかけないものである。

撫順とは、かつての「満州」の都市で油母頁岩などの露天掘りで有名なところだった。

笹本氏の母は、そこでウエイトレスをしていたのだろう。

そのような人はたくさんいた。

しかし、その息子でこのような詩を書いた人は、ごく稀であろう。

これは日本の植民地主義批判の稀有な詩である。」

つまり、笹本さんを育ててくれたお母さんは、佐賀から撫順に渡り、撫順にいたことがあるようなのです。

こういったところにも第五福竜丸や大石さんに関心を寄せた人と「満州国」や中国との関係は、存在していたのでした。

3. 中国における第五福竜丸の記憶の忘却

私が、北京に長期滞在していて驚いたのは、周りの中国人が、第五福竜丸やゴジラについてほとんど何も知らないことでした。大石さんもニューヨークに行ったときアメリカ人が、第五福竜丸のことを知らないことにショックを受けていましたが、中国も同じような状況です。ただアメリカ人は、第五福竜丸は知らないけどゴジラは知っています。

1954年、外務大臣だった岡崎勝男は、第五福竜丸がアメリカの水爆実験で被曝していたにもかかわらず

らず、「私たちはアメリカの水爆実験に協力する。」と発言し、多くの日本人の反発を招いていました。このとき日本の反アメリカの世論は、最高潮に達しつつありました。この時、この反アメリカの世論を鎮める役割を果たしたのが、読売新聞と日本テレビによる「原子力の平和利用」キャンペーンだったことは、大石さんもお書きになっている通りです。一方、この時、中国では、日本の反米の世論に中国人民も連帯しようという動きがありました。周恩来は、第五福竜丸の被曝に関して「アメリカ帝国主義が、アジアの人民を被曝させた」と手厳しくアメリカを批判していました。だから1954年ごろは、中国でも第五福竜丸は、よく知られていたとあっていいです。ところが中国ではその後、第五福竜丸は忘れられていきます。中国で日本研究をする研究者レベルの中国人でさえ「第五福竜丸のことは初めて聞いた。」とっていました。おそらく、日本でも武藤宏一さんのような人がいなければ、第五福竜丸は忘れられていた可能性が高いですね。残念ながら中国では、武藤宏一さんのような人は現れず、第五福竜丸は忘れられていきます。そしてゴジラもまた、中国大陸では知られないまま来てしまいました。

そこで私は、北京で日本語や日本文化を学ぶ青年にむけて“北京ゴジラ行脚”を行い、ゴジラや第五福竜丸について広く知ってもらうような活動をしてきました。2006年の北京大学での授業を皮切りに、北京林業大学、中央財経大学、中国メディア大学、中国人民大学など結構いろいろな大学でやりました。

もちろん“北京ゴジラ行脚”では、大石さんのことにも必ず言及し、「この第五福竜丸が、平和運動の原点だ。」と教えています。大石さんが登場するNHKの番組「そのとき歴史は動いた」の動画を見せています。

この私の“北京ゴジラ行脚”の授業に対して中国の青年たちもすぐれた感想を書いてくれます。

すくなくとも私の授業を受けてくれた中国の青年たちは、第五福竜丸のことは記憶してくれるはずですよ。また、2017年ごろの中国のテレビ番組が、ゴジラに関して特集を組み、そこでようやく第五福竜丸を取り上げていました。これは、中国における大きな変化だと感じています。

4. 現代中国における核の表現に関して

それから大石さんの『ビキニ事件の真実—いのちの岐路で』（みすず書房、2004）の英語版を北京まで送っていただき誠にありがとうございました。

この英語版序文を書いたピーター・フォークは、書いています。

「この本を他と一線を画するものに際立たせている中心点は、自分自身と仲間たちのために正義を求める大石さん自らが語る感動的なたたかいと、ブラボー水爆実験は人道に反する恐るべき犯罪であるという公的な認識を求める大石さんの熱い思いである。」

ここで注目されるのは、正義という言葉が使われていることです。日本社会では、冷笑の対象となっている言葉ですが、大石さんの志の高さには、似つかわしいもののように私には思えました。

また、リチャード・フォークは序文でこうも言っています。

「大石さんが感動的に描いているように、称賛すべき例外はあったが、日本社会には、過去を振り返らず未来だけを見るようにと仕向けた政府の誘導を後押しするように、全体として被害を否定し、避ける傾向が生まれたのである。このことは、オバマ政権の世論誘導を痛切に想起させる。オバマ政権は、前進することに焦点を当て、後ろを決して振り返らないと称して、9/11後のブッシュ時代の拷問戦術の犯罪性を調査することを拒否しようとしているのである。法の支配と説明責任に対してこのような態度をとることは、どんな重大犯罪をおかそうが、公職にあるものには刑事免責が保証されているに等しい。」

ここでは日米両政府の「未来志向」なるものの内実が鋭く指摘されていると思いました。

私も、この「未来志向」という言葉が好きではありません。この言葉は大石さんら被害を受けた者たちの訴えを封じ込めるために使われていると思うからです。

被害者たちを「いつまでも過去にこだわるルサンチマンを抱えた人々」「前向きでない後ろ向きな人々」として認識させ、切り捨ててしまう作用をこの言葉は持っています。

しかし、「前」とは一体どちらのことなのでしょう。過去から未来に一方向的に時間は流れていくというイメージは克服される必要があるでしょう。

むしろ、フランスの詩人ポール・ヴァレリーがいったように「われわれは、後ずさりしながら未来にはいっていく。」なのでしょう。

さて、私は、大石さんの本の英語版に刺激を受け、『ビキニ事件の真実』の中国語版を出すことを着想しました。なんとかしたいのですが、まだ出版にはいたっていません。

先日、中沢啓二氏の漫画『はだしのゲン』を中国語訳している板東弘美さんにお会いしました。板東さんによると「台湾では出版できたが、大陸では政府からまだ許可が下りず、出版できない」のだそうです。一般庶民の中国人に漫画を見せると好意的な反応で「全く問題ない。」と答えるそうです。ところが、中国共産党の上層部にいけばいくほど難しくなります。

「日本の被害の側面ばかりに焦点を当て、中国への加害を忘却させようとしている。」という反応が返ってくるそうです。『はだしのゲン』はそのような作品ではないと思いますが、中国共産党の上層部の人たちには、この作品がそのように映るようです。

『はだしのゲン』は、世界中で様々な言語で訳され読まれているのですが、中国大陸でだけは、まだ中国語版出版がなされていないのです。ゴジラが中国で知られてこなかったのも『ゴジラ』(1954)に反核のメッセージは含まれていたことが、関係しているように思われます。もともと言論の

自由が制限されており、習近平政権になってからさらに言論の統制が進み核に関して敏感な本の出版が、難しくなっています。

大石さんの『ビキニ事件の真実』中国語版もこういう中で難しい状況におかれています。

粘り強く取り組んでいきますので、中国語版の出版もうすこしお待ちください。

(続く)

市民科学研究所の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただければ、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100 円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる— そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#) ← [ここをクリック](#) (市民研の paypal 支払いサイトに繋がります)